能楽書集 乾

中村俊定文庫
文庫 18
489

宝玉堂文庫

# 雲まろ免 上

四時の物色ゝ弱るゝ年ゝ重て天の
五十五歳を待もの五千年

倉狐

雲丸めらるゝ度さたかゝるまゝ
きき知たゝふ事のたゝる
書物倉おほえも頼乃拍子
鐘ゝうかゝ五位も爲ゝ
矢津くゝ月ゝ森 結上
おゝふ杖のまゝ

寶馬
素外
津富
五穂
乙雄

中村俊定文庫

了

木

馬馬

ウ

清しとて奉るとて酒　沾涼
大丈夫のとのゐ　花縣
戸樋の伊達も深路八夜乃月　爸梁
兩中小菅に小振々かし　木丹
あるく小倉景の老和尚　雄
鈴鹿　芭蕉の壹　外
柳ちる風の川和歌けけ　馬
菅清水に月　梁
年清水　蕉の季　丹
足駄かな中みち孫宜此力壹　涼

梁

ナ

相似ふる花の春毎あるひるす
同じ畠乃ちに葉すしろ
六地義是ちなた左ちのしろ
大孝紀の馬ちあれと老
下されく白衣小月ち紋ちの
要の事ちちち吹乃点
菅ちの紀松ちもしれちまて
能ものちち　ちる佛　五九歩
おちちまを無一もかき耳乃ち
めちく　かちちく国のち月失

富　連　外　雄　梁　縣　丹　富　縣　梁

むさくるしく結へかるき儒子の常
まさくるを道に銭を食足て留る
玉川の月の影は傷ましき物出く
入用に成ぬる世の中
秋好の故殿をたもつ屋きる
調度てあるものの立せば
世に珠数を浄土は数をかけて
ゆくてのあるかの陽乃重
かくせこの言葉を見乃る孫を
為もこのはるかれもくる涙

璉 涼 雉 馬 丹 縣 梁 璉 涼 雉

五千年の十夜の夢よつけて
今つ人笑の句とおもへ

梅郊

草乃戸小月歌は孫は書夜うれ
鐘とり はく服ふさもうれ
初ふ好の志ひ入江の懐年
菊の小笠れ見ることの乃よき
やる毒なのの菊るれは麻もや
窮もむ ふれはとくと
抱ふふ言て居るの宴ものう
ゆくれ ゆくの陽子の異

寶馬 素外 泊戸 津富 木丹 戸 外

ちゝ小春小宗小伊吾山もゝえ
まつの庵ちゝ大根てまゝ
歯ゝ北笛も自然の神いさま
ゝゝ月形まてゝ
腾ゝゝ袖香炉
月ゝゝ北嶺峰乃秋
貞室の御来ふ鈴深く
月癡文二百ふこの月乃ゝ
ゝゝ盛ゝ百万遍も
出代り 時のめしゝ集ほく

馬 郊 丹 富 郊 戸 外 馬 富 外

乙ゝゝ紀ゝ門ゝ巣をゝして
うまいゝゝゝのえゝ横顔
貴留ゝゝけたゝき和歌も
池紋面しゝゝ子ゝ年の哉
浪人を皆慰慰小廊をたて
日面ゝ宗情な生涯
茅の花ゝ卯ゝてゝ立綿車
乗ゝゝ杭ふゝ蛙
夕月と布袋ゝゝの壹戸
こけら一軒宗祠乃茅屋

丹 郊 馬 富 戸 外 郊 戸 丹 馬

歌

ウ

口切の味噌よりあるの茗汁　富

雪乃明石の春の雲　郊

ウ

冬ゝ歌きいと云ふ所胴岩を　丹

襟を夜肥満い屋しき　富

及しい庵をゝぬ日かの寺原　外

曙もよし入相もよし　丹

見ゝ見ゝ見ゝこゝ探一拍へ　戸

踊しるものぬるゝよる波　馬

四

春

あいさつ手ちのもちとめ主淀　古蒼狐

柳はおゝる川ゝひり石　雅郊

苗代ゝ村の見こゝろ先ゝて　宝馬

月ゝ雲ゝ霞ゝ多茶仕ゝける　津富

雪ゝ息霧れ乳ゝ冠毛　素外

信ゝ乃ゝ別て行旅ゝ　木丹

ウ

九ゝ折ゝ新一ゝ乃ゝ二ゝ乃ゝ　郊

夏ゝ毛ゝ白ゝく深倉乃風　馬

五

ものこそ立流れ来れる波
登は白浪の寄るほとりの色
画きて八服小路うきむしろ
麻乃衣へ紫の衣よそ
甘子の丹誠菊小を
山ハ紅のもみたこの枝
玉の月形秋かけて服なし
片側所のうしろもく
おとろも花乃波事田家馬
芹の志りくぶ小ぬきて
小

富 外 郎 丹 富 外 馬 丹 郎 外

酒

十鐘撞の池ゆもなりぬれ
休しあうるく菩提場の
枯と低片寄てある 梅木 神
毎り留まてもきれを
地義うう刻こ
一口酒の味の松葉しる
あすう京玄葉うて新芽
ちりほうきまうう動
月新乃家葉を伊勢温泉の
頭う眼あるとき大食乃松

馬 丹 富 馬 郎 富 丹 郎 馬 外

祖うも敏北屋く坪乃内　丹
日屋を〻沈ム磐土の多　富
うを羅漢行肌ぬきの紗丁坊　外
拾をけと舩まよくる蓑齋　郊
一見て一里助うる　船　松会　寓
加うむうの人のたまたまこの　丹
上野又て芳野もてあるものを　郊
満るほ乃ち秋末ちい角うて次　馬

はうのふうき字
おーーーーはけうえ

むす安藤冠里公宝歌共角う
別の大夫敷の詠詩と奥行をあて
のち世ふ天ほ法線てなうう紙
神物孫常ム公初汗物こせるひく
先祖五千堂う孫の百歌百巻紙絵六う
乃人をてて僧ふれう既隅屋の上刹
なうう時共ふ人の詠ふ問上暑ふ
ふ紙の巻をお前ふ川ふ清ふ上
ふて　ふを新ふ年の一万句と
法ふ刹ふとふふと今ふとおい出ふせ
ふひふあふれふ向の巻乃ふふ重て
彼ふうのふふの連歌ふて六ふ乃紙を

た

せきやとのうせあふを万歳洞　古　蒼狐

雪を折らるる折らるる年乃一万句　常玉

月すまうくの雪れふるあと　寶馬

この人数は寿や松をあやまるん　鴉鳩

なるぬ流を乃音もゆきそく　石絲

ひる屋月秋ハ新巳の里あるて　乙雄

新蕎麦時と先るあるせる　李水

ウ　霧も似れ見身なるゆ中のとき　馬

一日うるる　靈屋拜見

市市

雷除うなる冬の葉をもひ

大百姓うるこちの祝んちろ

先きもこのあちも十人並ハ

市忌を小袖乃ハ定ける

足結しを色子茶屋の奥ぬて

麦冬の雑れ色とよく

川永ハ流同の煙と吟ぬて

多義ハ旅人宮ハ行る

月今宵の法度ハ枕と

習る芭蕉れきよ川

玉　水　鳩　馬　雄　玉　水　雄　馬　鳩

ナ
茸狩の若：蔵原小秋ハなし
馬抱とめて女子助けゐ孫
九室より八洲の鳴乃噫して
大從せの李れ懸ひ
雪山のかゝちすゝうともみ遁
御先砌渉 唐へ二衣おへつと
外科も薬本道もかゝ儒も医て
小庭安好れ無法はかなる
あさしの初茶ちゝせるらさ六
神乃みちまてもみつしの月

水玉鳩雉馬鳩玉水雉鳩

ウ
連歌房と花下は此名と補にて
猿ゐの呉名も心よりうら
陪よき人家猫の両物研立て
満テル欠 濯の九十九ゑ忌
入都子も作法乃答の法借後
氷正 直千葉とうらあ孫
跡より咲せよ無の一万句
去ルこと七尺 眼案 然藤

玉馬雉鳩水絲玉馬

追福の集おもしたてるのよ
告ゆめ

亀遊

木の葉其池乃摘葉すゝ
ゝく年くれ霜ふる紅葉
道ゝ人の宮まて　宝馬
ゝゝ猿乃ゝれ　奮渡
昇る月高山れ後ゝ　遊
小庫　ウ　馬
禁酒して伊のをたのゝれ秋乃面　波
末の娘ゝ　鞍ゝせん　遊
馬



樽を波波ゝて清れ髪のうへ　波
祈と伸ゝ　ゝれゝけもの　遊
他ゝ　ゝかまてゝ　馬
更ゝ　ゝ家も　眠ゝ　桟ゝ　波
おゝ寺ゝ月ゝ　ゝ　遊
百里ゝ　ゝ入院ゝ　馬
ゝ波の白ゝ似ぬ　岩や　仝
ゝ　ゝ　蝙ゝ足　波
ゝ云ゝ　ゝ云ゝ　仝
ゝ　ゝ　ゝ　馬

雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　松ヶ岡

眼　清て洋むむ母の画すうと　遊

調度まてむうし細工はしまさハ　仝

仲達なる所うし伊達なる荘　馬

坦同なる白いくるの雪ふるかきつたる　遊

あうしうしうてるこん世乃こと　波

誹行聊宗祇ふも朱結同ふも　馬

孫ゥ六十　彦ゥ初　老　仝

出乃言はまたゥ雪ゥ隆の色　遊

笑さへ著は月乃おさうう　波



雪もよい何ふゥ宮ゥ八幡ゥ　波

月行の牛ゥ添し寿き　遊

ふ例まて東ふ見を撰ふふの雪　仝

張居仕ふを見ゥれたゥり　馬

雪ゥ雪ゥ護ゥ本遥ふゥ言　波

震ふ雪ゥ波ふゥ　遊

新雪も私ふ義乃山　馬

孫鴉いふて芳し紀州　波

秋

名月や清水流るる滝の音　古蒼狐

庭ゑ山路をおもふ秋情　寶川

菊似たるたくあんに隠れ　宝馬

小竹筒の酒せん甘露ゑ乃ゑり　寶一

世ゑ乃ゑの養おもひき初時雨　馬三

ウ

啼るたりゑとゑとゑとゑ

ひるゑりて明ゑて天ゑる雁の夢　執亳

百合ゑゑせくも俤いくゑ　川

三

行かぬ姿せゑゑ乃ゑ見ゑゑ次

意せまゑゑゑゑや初る春ゑ

ゑすゑ雲のやゑゑゑ俤乃ゑ乃ゑ烏　一　馬

ゑゑゑ沖ゑゑる松のかゑ　川

懷ゑゑゑゑの葉ゑれ二人ゑ　遊川

縁ゑゑかゑんと母ハ居風呂　三　馬

月巻ゑゑ懸乃ゑ行偶泊のゑ　一

池と場ゑゑて遠ゑ笠乃ゑ　川

ゆゑるゑ小糸円傘ゑ乃ゑて　馬

ゑの外ゑゑ人野ゑゑ　三

[illegible]

一　馬

[illegible]

三　川

[illegible]

馬　川

[illegible]

三　川

[illegible]

一　川

[illegible]

三　川

[illegible]

一　馬

[illegible]

三　遊

[illegible]

馬　馬

[illegible]

一　川

[illegible]

馬　馬

秋

いてゆきの萩よりおちる水もみな
荷面乃印(露)ちらかす月　　古蒼柢
牛飼のいそらぬ秋もみなれたる　　桜橘
綾く形猶ほん布志川の色　　寶馬
元勝る夏は行橘ちる原し　　乙雉
毒ぬ水室乃萩や沙羅や　　橘
換換を沖しく咲く蓼の穂　　馬
浪神の秀ちる秋風　　雉
　　橘

如いてき別原乃淀清ぬけて　　馬
佐ちぬほくちと投出よりう　　仝
甚吉の眼まそ見ぬ高乃　　橘
山ハしく神て夜ぬ久れ　　雉
小型乃赤き衣ち赤紅珠数　　馬
指ちて川淀ちしく　　橘
風ち今表ちや五更を忘ぬん　　雉
かし夜ぬ乃ちしをかし　　仝
ちをちの衣の蘭ち了　　馬
日ちよ蓬ち見も深藥今乃比　　橘

第の山後むくやまとさくむ山
いなとも乃ゝ雲やゝ足ゆれい末ば
草履袋妹れくやまを
紙ハとゝ神いゝ乃るゝ小
ゝれ花紙麻ぬ例を富ゝて
ゆく馬を清乃あゝくゝ紀
もゝくれ乃奥ゝ市ゝ紙ゝ
同巻の寺て祝ゝ石の賀
ゝを入ゝ乃ゝ辰同ゝゝ
れたゝゝ春ゝ戸の年

橘　馬　雉　橘　馬　雉　橘　馬　公　雉



新波ゝ信乃山をゝす月
秋ゝゝん笑やゝん
墳掃除ゝれ家ゝ拾を
拾ゝ紀なを得ハゝるゝ
服引の作て乗郷ハかゝを
付ハ珠下ゝを尾ゝ雑
咲出仔花乃ゝけえれゝ移ハ
宇ゝなゝ西ゝ永ゝの影

故道　橘　馬　雉　公　道　橘　馬

夏

海たゝかるてたゝける納涼うれ　古蒼孤
たつ五つ四つみーら夜乃　達　蒼尾
車陣の今宮役ふ行ふ　宝馬
什ハ国こしれ拵ものなる　尾
吹屋の時て前ひし紅屋る　馬
さゝゝとと稿ゝーなのれ乃ゝ　尾
ウ　年千の形やるもあり老なる　馬
拾ひまゝとと什と一な　尾

朝起の京ちつのこ牛あ日　馬
茶屋乃客ゝ雲ハるとの　尾
夏癖くと門徒寺れ法釈顔　馬
松前ゝけ山乃生きハ　尾
ほとゝきすなも家物の入ゝそ　馬
拾ゝ月ホやゝゝうゝ服　尾
女ゝ男ハれゝこゝゝゝ　馬
ゑとめませよゝかく安　尾
参ゝ所完小矣山なあ寺厨　馬
あつまる蝶の眠ゝ白くゝ　執筆

対馬の旅くるまに果小枝を折り已
尾
春色の及くる事復乃新
馬
百姓家数居小鹽を乞ふく
尾
ゑ〻〻係きれ夏を富ませる
馬
石菖のたも花ともやたもつむ
尾
聖徳太子 古好こ乃像
馬
弥勒載つ小刀の味くまふ人
尾
ひとりまん丸ともつ〻
馬
もきとふ〻ふれの紙忠乃江戸揺
尾
國西つ〻き春の松れ月
馬



隈筆乃志〻この水をぬるまるく
尾
千年を経へ枝 この離れ仕
馬
庚猫北見の服乃ら透通至
尾
遠岸大智 枯枝さいの〻ろ
馬
石焼の石ら〻 巴紀夏腐あ至
尾
四方表れ寒 ちなん家
馬
枝至し花乃鹿とめ〻ま竜
尾
山乃習こ〻〻 寒中の相
馬

冬

夜はしら雪の雪乃吉　古蒼狐

書なるの紅葉はなる影　寶馬

西東もよろ社の宮メく　巨川

彩雲は雲と栗風さいら也　左簾

まろけ金木槿ふ孤る所の家　千調

ウ

雲もなしく松秋のうら　倫丁

彩蕾喜れ示のうさへめたる示　江雀

梅广ふ僕ふ字ふやむ　桃義

薙髪して多年の工夫あらちぬ　馬

林香くさん七野七軍　調

夏卅の良をして居るかるむら　簾

一句さらんてほらおす待　川

敷はえも思ひをめ昔ろ　丁

辻ふ一戻ふ梯石　霍

大麻乃引あまさまやり神　義

花や母の山れ陳地乃し　馬

いつもあく他もろ陽春の月　雀

戰をさやは清明を節　簾

己

はきあひも労ふあるかねの土百姓
仙臺ふしばらる生出しるゝ
甲子れ畑そそのうち己。待にゝく
おそむろふ来る風の茎乃香
油繪の首節細末の人達
多く舟まろ外惣菜らし星
流俗乃大律の四極挨らうけ
歯莖も寒し追うろし馬
兀山よあらしさ毎なる月ゑしい
誹諧林ともちき秋かゝる

川　義　調　丁　簾　馬　雀　川　丁　調

む
丁

家子又紅葉しふうり梅もしき
菊以てる把や利にあるらしむ。
うなひ子れ邑暖らしきさそころ
おんざいふ楚大釜乃下
滿汐とよくと澳せくか一陣波
儲け日和と雨移を岑める
西へ行くハ付きうる花乃人
其夜更るしあやうしハ此

義　雀　調　丁。川　義　簾　馬

# 春

晴天の所を引立ぬ雪の外　古蒼狐
かすみ立ぬ青紅葉山　一島
別荘乃春を喜ぶや餅くらむ　素外
あたゝかな世業に出入殺く　木丹
黄昏の淋しさ月を押うつる　東湖
風引　柳　蕉　ウ　白いそのゝ
笠掛るそれ山ほゝ今園の麻　其鳥
旅ゝ寺住乃　出家　侍　蘭里
外



九年酒小淋戸拍子哉　島
かいたゝ　ゝる羽織下駄　湖
情しゝ心の付ゝ　鳥
見ゝ笑ゝ乃　ゝ　ゝ　里
指折の吉もゝの小吉物見　丹
杖つゝ　ゝ　ゝ　ゝ　津富
むつゝの此八景の秋　湖
名ゝ　ゝ　ゝ寺此場ゝ　島
のんゝ　ゝ　ゝ　ゝ　外
春戸此　ゝ　ゝ　ゝ　丹

きす掃の袴へとるあるに髮
京まもなくなハけるて浮尻
一ちやり鞠ハ打ち来 倒さめく 島
錦を紡糸も 薩いろ時 湖
多彩合もあるや河岸ハ紫変 富
牧宗 月〳〵 面馬のうろ好 島
かさをを脱たるれて 猿 里
城穴を出る山 蝶 乃市戸 丹
蛍迄も来るれ月の屋やうと 鳥
志ばゝくみ行きよのむろ 外
 島 丹



基はうのうかを心ハあるきめ
ひうう〳〵打も義のうう乃 湖
履拾て服ふむ〳〵ねの馬の岩 丹
衣のうち宿しゝ乃宝 外
たゝきを縄をゝれて動きる紀 富
ゝハ鄭紙 抱ちほうう 里
岩張乃報をを岩紀一末 湖
ををゝ 鐘のもろ和ゝ日 島
 宝馬

冬

初雪や稲の古株みなしぐれ　古蒼狐

見はるかす里の鐘さゆる暮　寶國

常ふるる紙ゆゑなるべし

宿車のもとに能書也ける

ウ

厂の李陵の月は秋ぞ冴

秀押つけて紬ぬぎ捨

燈風の中ふ奇異なる恋かな

桃の仕ふもゆかれふるまひ

古き云ひ安もあるべし

志ぎてと半しやと覚ぬ舞

秋を宣一夜しはくも納涼川

蛍も紀の神を寄せ

給仕ふて宮れすの見連て

碁を白かるる重箱の月

拍子ふれるも九つ又ぬ

旅も草鞋かぬ紙れや答

光の香れ原くそゆる寺の門

経ふみ手やまよまる

立方の心もちなく永く
動まなくして佐渡守と医者
すゑ知らず御手水掛る石燈籠
おとゝきしたみ寺に八寺
音楽小弓和歌感応眼を眠王
ゐもちもち京の女兄弟
書状和文仮名のとゝかし世安
一アんりのたい国乃舎
月出るゆゑ夕べ屋く朱ゆ屋
色きく庵く検田和く

宮

ウ

ゆをおめ〳〵宮居も海の中浮て
ちんこめせとて臺戸おそゆる
野袴を武士小ゆるゝ町人ゆ
伝了なるやら侍示家所
一片れ雲小八日乃後光さす
よん年寿小しるもゆ
ゆゝ小四位五小咲ゆゝ
掛をゆゝ乃土筆ゑんほく

寶馬

寶國

冬

あつまるべき堀小路の諸親類　古蒼狐

松青くして石ずゑ　蒼鷹

斧の柄とぞ朽ん方もなし　宝馬

とりはくるる春は来ぬ　鷹

朝まだきより夕暮まで　馬

鈴虫の声は聞えぬ秋　鷹

ウ

草の花とも紅の袴　馬

東菖西とぞ白戸乃　鷹

豆腐屋小菰葛あるべきなまぬるし　馬

大事の姫御前はかくこそ　鷹

人を立て牡丹は城もかなはず　馬

日は暮て　を　的乃　あと　鷹

小鮒の風ぞ吹まるべき　馬

志ま波ーを　ぬ　鷹

道迷ふいれ捌を世の恐入　馬

まくまきまき国乃　身新　鷹

花姫ハ居別保猫ハ　馬

まりまを祭田乃　鷹

根
根

ナ

余の川岸にぬけ出たる舟
眠とさまし中喰へるもの賣　鷹
両袖八翼ふ等一雪乃蓑　鷹
揚屋ら佛ふる其角ふこく　馬
入歯ふく御座碎んと戦慄れて　鷹
土用のうちれ服を水ふる　馬
安保ふを扇乃一星塚　鷹
家ふや神の矣乃根保ふ　馬
ちちふく明ふて鶏れ寒を　鷹
姻らもて餔ふを　馬

ウ

秋もたや男ふんれをむる二日月
柳ちふせる苔のふ風　馬
之年ら苔のむ傷を寒ふ　鷹
好を影ひをれやられ　馬
池を茶釜を流す囲炉裏れ茶　鷹
外むりちと昼　馬
家を文を茶ふ頂ぬ蕪　鷹
まををるの谷水　馬

唐

紀文

春

優婆塞ハかゝりて足駄や花乃雪
神一通 自在宝ゝ多
長田炉叢一度小言をきくて
干菓子ときれかゝる 唐のやまと乃
名月の空ゝ雪もなき
古井のたゝ紙 遠まさる蓄
茶屋ちゝ信人合へハ嵐茸
親ゝ ゝ 作ゝ 文山

古蒼狐
帯踏
蛇旧
汀汐
雪高
素同
丁斧
珪賀

貫

ぬ

月貫ゝ紙頭ゝ ゝ ゝ 北
横 紙ハ偶田の ゝ ゝ
生茶師仲人ゝ ゝ ハ
寝 ゝ 屋北 ゝ ゝ
雨 ゝ の ゝ ゝ ゝ
馬の ゝ ゝ ゝ 蔵川紙汲
乙乃ゝ ゝ ゝ ゝ 福
大 ゝ ゝ ゝ ゝ
梅の月節乃 ゝ ゝ
出 ゝ 乃 ゝ ゝ ゝ 元

合浦
旧
踏
高
汲
斧
同
浦
賀
汐

屏風紙布の底ふるをさく
大津八町切口をこそふ
よい新しい屏風と雪の香
蓋をこそ他のね織ぎるく
四ふをこそ折ぬ蓋をこそる芦の中
を踏ん石卿野よこそ
秋風に雲子の掛中乾くも也
十日の月ふめつちと盃菊盃
辻角分の月ら玉に梅をかいて
蓋をこそ紙香をこそ新下ふひと

踏同旧高浦賀谷浦同踏



盃附の松を不形る旅 出発
情けもふ蓋ふ蓋ふ紙 代
紙をこそ月ふ刻深める皐月雨
やハくと蜜に葉の蓋ふ外
蓋に蓋月を月をく市の中ふ
れ茶乃ふ紙たそたふ
されハこそふまふ花乃 添
おこそふこそ紙高のもこそ

汐旧賀谷高旧踏宝馬

# 夏

一村雨の過ぬかと見る
雲の間より清水のまこと
樓の音頭も扇ふりつく
解限あり　酒　あり
出られぬ三日の月
芭蕉の葉の上まで
古歌の紙に入れた
年則うたて旅の恋

古蒼狐　不逸　宝馬　春彦　四又　掬之　柏子　李風

雖の場所の蓋ハ高つのを
庭へ吉祥ハ出て水仙月
元日ハ孝ハ高ハ地獄の
文領められて初よりハ祝宜
四本の紅衣紋流の鞠の
人新子紀　文月　乃影
牛たの心毒も心了解もて
乙多お竹ハ居ごゝろ
義を待し新乃出意紅葉け
泳ぎ国可ものなり

露十　双車　彦　馬　逸　子　之　又　風　十

沖の帆乃ちらつとともせぬ霧と
孝人を石 巡見 乃 殿
玉もを兼家の井うちもるのけて
黄葉寺れ何をか茶会
かとときを綾るのきう法光寺会竜
杜ふ八あ中る妙り袖
三園と秋葉の風情十九九
秋八巻平 研るをもるる
感状の又感状小世我 道
足駄てりる別荘乃川

車 逸 子 彦 又 風 馬 之 車 子





雪れ自我宮をもるるの月
絵兵の水ばらけれ重
三ふれ英女一筆りるる
載るを平みるく拙定ん
ちる雪をはもを共をこう
り郷の修るたのむ初猿
咲ばるる乃雪ふ信をし
うの も家さて 咲 乃 悲

彦 又 十 馬 之 車 逸 馬

先師の句を一とせある人の父乃七回忌ふ
せにふむけやる河内の国柴風なりむ
せられうしつおもひきやかくまで月を見れ
ぬくもりふかきあるを侍て墨画すし
嘱年惜むへしとの人

広の寺に三年のとしをこもれ　旧波
打しへの紀氏の通り藤
角なれ打ふ家れ巣宮を
水に社氏の氣も金ふらう
うつうつと鳥ふ起る春の月
今うつもそれ紀氏なあるほ



四斗樽の田を中ふ稲の出来
あるうへ玉乃白あるうへ
金杯も心ハ古ふる面の町
女ふ姫ふ引ふ
むふ
鶴ハ浪の音ふ侍ふ
琴聲ハ一羽ふ鶴ふ
ハ
朝を又ふ
大鶴ふハ屋ふ

蝶

白

月乃ゆきめの見事毒ひ
いくらかもむくとも蝶の きつかを
伝なく春ふ金陵の情をれて
ものいふ一服ととと乃意
今の世内みるもふ書ハとそ
木幡れ里て拾ふ石襄
白くく拾ふ残る叶の雪
耳を隆しを接ぬを結
節を陸しに春も用くふ今
二度目の姓みたふ黄氏

やうくと知本百ふあふとき
寝もおろさまて流石なる唐
沈水れ動けハ矣ふ月と月
侍くく日和て綿もふきぬる
素人相撲ちうら競や根を面
いそく時みそとんふ石菖
うへはうへてもはさぬ蜀やを
白て侍て 杏乃 外吹
咲塔て日ふとふ厚紀花の落
蛙を春 球ふ うたふ 華

掌

冬

古池のいらみそめぬる氷の面　古蒼狐
松ゝ日乃出ぬる枯芦の隅　寶義
里人の伸するうゑ球場畑　歸興
なら茶の小家の並ふ門く　仝
吹風ゝもの香ゆき初月哉　義
西瓜もてり肩ゝ掌　奥
閑寂の形ゝを樂ん衆八佛　義
買そこゝ乃ゝ人ゝなる淳　奥

在寓れあきる嵐も濃ゝそのの
椋の下ゝ生ぬ好きゝ楠　義
雲乃みゝ孫ゝ生ゝ月見ん　仝
芋ゝ掘ゝ日ゝ衆の人ゝ寄ゝ　義
老の伴ゝ若きゝこの中ゝ入　奥
あゝとゝ口きゝて祐ゝ根　義
福引ゝ分ゝ袋ゝ有ゝ柘ゝ　仝
星も脚ゝ月　暈ゝ　奥
樂墻の外ゝく白ゝ山ゝ　仝
杖も忘ゝ懲ゝ高ゝ　義

ナ

一日〻一時かゝる碁をうちて
木葉落れ傳れ　十月　　奥
朝ハ晴メアハ雲ア来ハ時雨　　義
女の声ハ戸敲　ゆのしく　紀　　奥
淺妻乃ふるゆ似る保川ゆ　　義
神垣〻ハ　徑　以詩く　　奥
ゆとゝきて唐ゆ　ハ琴を　　義
牡丹賞〻く　唐茶せんしる　　仝
玉孫乃たまく　細工ともせて　　奥
関白様の侍原居乃所法　　義
　　奥

ウ

川音ふ風の寒〻むゆ宇治乃月
寄〻むきてゆ詩も志ハ如く
大的ゆ立並ひる肌さむ〻
埃　焚付〻庭を掃　節
世のハ地震の繰も八乃常を
西〻入日ハ只ちゝ如ゆ
遥遠ゆ武二木を法乃場の花
同所　御　柳連　翹

義
仝
奥
仝
義
仝
宝馬
奥

冬

山茶花の花のこぼれそめぬる
小春の暖気志賀りある庭　卜人

咲ぬ咲ぬ似て僕連亭
ちらるとおもふ八重もまたくれ
新雪れ豪際人も殘る月
彩ちる秋を半るまち　古蒼狐

ウ
車庭の彩蒼夜宮を並さきて
叔父も碁こうち囲ハ画を

甲州八尺ぬ富士を人形不
笑蕾清も村の傳もの
老僧の笑えぬ半ハ行てな
弁乃も月お行うち光
人るみれ見ぬて書そほうか
ちもせの中まん九ち尼
人の蕾蘇仮蘇仮さ高くそなき
東向みて赤ハけほの星
ちそれ果そあるる峯の色
ちはてけるる蝶の形紀

初年は陸奥屋敷に蕉翁を招て
笑て抱るれ 遊たるとと
遠国のうちに小笑えー 臼の唄
松島にて八つる國 乗りて
舞踏の時 面をとて家戻し
おすて夜より八仲まれお令海
うう底の嘆 婦 自ら令小
をいとるる うう 商 人
筆策の稽古けする八つ下り
月も出る底る策 墻乃空

ウ

ちるかなる桐はきをいそらむ
秋さ風なれ 茅 おろく
を茶のくくまるの庵めて
海なこの茶屋とて人さるる
あつうひも餅茶儀 ちりの也
未ちきに月 紅 始まる
明るに思八 依 道 乃 花 宝馬
たなぬちうう 枝 振るるれ 卜人

夏

日和のゆ大仕生のうち松魚
安樂國おく湯あのうれ夏　古蒼狐
庭さうと山を俗水塔考く　崔郎
風を言れるう詩のゆり除
十文字の月曠かまし今日く
楷紫まそ椎ゆと濃やう
ウ
泰平の時下恐ゆ蕚この軒
好きうもよく家物ゆ茶瓶

振衣未さるくれまと　李
知のおうしおあうき
侍ゆうも男ゆうゆう言軒
つめゆと亦を考　ゆ見乾
江戸ううハ世寅よあう西の町
昔の勝員ハ世ハ言ゆ乃月
いちゆ燒用米のあうはを折人
学醫のうしれ大たうけ也
年うれ第うう家う通昔詰
似うとういうゆう乃勝の

遥

ナ

ひとまとて揚弓を射る日の色さ
久米おもてゝのあつるい下女
うつり香や謡屋敷や春たけぬ
宮戸屋根ふく宿の夕照
一茶の十五夜はうつりおもきぬ
俳句八吉原 俳句 ちう
ちるさを幕湯ともふ寄恵屋
初雪てつるは黄菊ちる菊
月を眺南遥て山 残月
秋情寒み 海上 禅林



窖

ウ

青くむらくれ雲ちる呼
窖てさく穴を住なす八
雨米日算旨八桐さ止まりぬ
乃印ぬまりたく人のゆさう片
咲残菊の蔭れも名乃蔭を
同し 徳まとふ 杜子 杜糸

外

春

白う咲梨の花なら　朧　月　　古　蒼狐

まちびもうれたもいろ彩　　午月

掛畳も陽小向こる　　津富

祥てもて　　木丹

かくてうの繋ぐ　　秋方

蓑ちめさいくとあ　　花藍

九月うつ時　　素外

ゆ引ちまれな　真馬の尾　　方

ウ

時

徒有板塀下ちも鄙ちう

咲入窓りを　はれて西國

麻こいてなるまつ　咲ちまつ

抑ち掛庵も　別荘の奥

焼塩を彩の砂　蒔ち

まちれ　ちち畳ちの彩

さちまちちち家けれ蔵の面ちも

自笑　其頃ち茶ち　屋も指ちち

時ちちぬ清の伊　ちる兼宮年

胡蝶　まちゆち　突車　鞠

月　富　丹　月　藍　丹　方　外　富　方

治承年間小倉宰相
年賀ニ　ヘ院ニ
賀茂の戸れあるの
山部ニ　山ニ
おくよりの　の文　和言
汁粉の　仕　
遠局の仕粉　
面根れ　
夜の中ニ
下ヶ奉行ニ　

藍
月
丹
藍
外
富
月
方
藍
丹



結構かに和れ　暮の月
菊ニて　恥れ　萩の家
秋もまニ　くるの書
砂　糖ニの　壷八
和もの老て　
神ニ　水識
ちるしの　
汁　

方
月
富
藍
月
方
外
宝馬

秋

ありくと蘭のもとやあきの声　古蒼狐

峯ハ志られの高きとき　雲　佐保丸

たゝ高き岳うたゝふ秋ぬれて

貢く菓ハ玉むらふさうり

内裏寄く俗言ふるものも月の影

竹の枝ゝの跡失もなし

菩提ハ堤の蓮仕ちゝのし

村苔剣ハ百たゝめ家



先生の更も吉野ゝ世の動を

既ゝ食ハ小町てゝなし

荒垣ハ幸部樂の文字も連陽ゝて

蛍ゝもハ池の苔ハものゝ

書陽ゝ的果ゝ花ハ見ハし

ハ次ハ居同を本陣の曠

古けゝなと鞠ゝ鞠立かゝ

余ハ稀ゝのたゝめ梅飾ゝ

ゝハ新花ゝゝ吉田山

杜の下井ゝゝハぬゝ

書ぬ友小虚病まつて廿年
俳句ふるまる 蓑塊
塔ちらく譚の脳梳 師匠
下まて五重の宮乃出蓑地
老の息ちん念佛も他力こ
虎子ちまけ乃乃の
かけ葉ほる新小嵐 鶏鶏
仏ふ例ふの八ふ雷こ減
蕾ふく葉史の天ふる川向
京ふ日ふ山のふふ



三つ栗の仲居の新も洗むけて
温め酒ふ小もし ふを人
ふちまや金ぬ信ふの打 碧
無ふ病ふ ふふ風ふ穎
久ふふ面のふふもヒ日ふ
泄ふふ子ふ成人ふを
願以此功獨吟ぬ花を向て八
平等利益 ふふ 曉

雪まろげ　下

冬

一夜はゝ十程ゝ積る日積ル

頭巾なくなる法ゝ嬉人　栗堂

寄せも親木のうるさ思ふて　寶馬

先ゝの角ゝ小ゝ事いゝ出て　素外

切ゝ出いとも白ゝ雪ゝ　沾涼

雪ゝ乃異ゝ　花縣

ウ

孫杉色い地ゝ数乃寒牧の弱　聲波

更ゝ山ゝの信濃ゝ雪ゝ　津富

古蒼狐

○特

一

葉門上戸と交て下戸と来
夕暮かゝる降てよい雨　乙雄
移徙のえ眼かゝる我の色　木丹
佛るゆい寿特なる妻　堂
為京乃時も更くゝる絶篭　馬
月をゝ三五出る踊り遠近　縣
逆風の新糸侵角力　波
寶くゝ打りひかる寝机　富
一図乃藝を弱をゝ　雄
廻廊歌小莖掃くゝ　涼
　　波

○欠耳

た

ナ

都出る新のとうしき嘉
美女をゝ行逆くゝ美人かし
主人乃打をゝ思ひかり産姿
妹茶かめて雪をゝて居
根い遠く大井京の大たゝ
滝な坊乃外を存せた
仏地くゝ欠耳小陸くゝ
けさまて小神畢月照出を
ゝの如の矢を流く森小溪立て
入をゝうゝ行をゝ銅山

丹　堂　縣　富　波　馬　外　涼　堂　外

ぬ
さら

ウ

半輪の秋の朔新すゝしくと　馬
流 下屋敷て出来る簾簾簾　冊
娘りぬ色と黄八丈白八丈菊重　外
彼妙色ハ孫して折さゝる　雄
迷傘一時も雨を妨ふより　富
たしかに晴らし八ツハツ先隅と　波
世ニ示を涅槃と花の粋様より　堂
有情非情の眼の覚る哉　去　馬




冬

富士ちりくる八雪丸ちゝのうさ弥　古 蒼狐
眉も娘さりとて窓前乃冬　江島
梁丸葉を埃と書のふく小　寶馬
龍眼肉の核拭つくく　津富
十六夜や明衣乃舟もかゝるも　素外
風れとてうし蔵ハ売つけし　歳島
ワ
又小さう翠翟を一羽も見らしき　馬郷
茶乾うす姿読の蓋　車十

いとゝも似し其母の稚立　里明
四　今年二十年ゝ
生ハ生へ捨ハ捨てゝ　杜若　外
見ゝ蛇骨と又せる堤と木　馬
遠棚隙彩も兜巾も法螺の音　鳥
牡丹解　水る三更乃淺　富
宝月小僕ゝ古々の咲きけ　郷
席書文度　唐墨紙すゝ　歳
咲ゝむ蕣を　庇の崖造り　鳥
暖京ハ見ゝ世ゝ年なる　富
明



十

陽炎も一圓相乃兩後れ笠　十
かゝゝとゝの　蜷川の智恵　馬
放ち馬繋　車も多羽縄も　外
石乃花表ゝ　蕨萌れ宮　富
言是の鞠不のくとゝ又　鳥
男女ゝ一ゝ隠居和ゝく　歳
ゝ系を主ゝ見ゝる風形松　馬
義ゝも掃ゝ根　梅合乃松　明
陰ゝ如貞半天のほとゝ　鳥
見ゝ生さしゝ古ハ立　外

咲はすひとりの笠の胸の月　馬郷

ウ

夜を白く妹の乳くさき　富

蘭や見も出離の朽木の情　南鳥

老俗匹れ俗なれたるめ　外十

奇特さよ大商人の四畳半　鳥

文字の古むも時代ゆうき　馬

音樂の雪紀奥ある花の雲

心耳　鼻目れ　肥茶弥生

○書簡

## 春

ウ

寂る事も下戸ハ下戸の花の蔭　古蒼狐

たのしみはまと暮まき　簡　亀齢

音信ハ蛙の色もめうてう

離を庭茂の田安めのせる

かけて干浴衣も月れ墓こゝも

風ふはうとと雲れ涼しき

黄葉の末寺ゆうむ掃除を

夫婦出るふを京を提童

おとこ山やはたちまちとけて白ゆり
咲ける支度の柳　新しく
白形の城の馬場の雪ぞこの
奴ども別して供　大将
古屋小世五日も待ぬ新
朝なゝ此京陽の香　奥
野鶯の舞ひ来る春の客
又萩まさくかし咲きむ
ゆふの月夕雪ぞ見ぬ
此藝かゝるよ泊春のよし

ナ

練塀の隅小まちむ花
尼の都ゝ摘まて茶艸
情おきよ節句の羽立ちきた
道あり引の山乃ゑ此方
又同し浜湯てまふ温泉場の友
まて参ゝくさて乃ゝ根
屋ゝゝと光りあき草文箱
内玄関ゝ別宅の幕
義初新樣ゝみちの出ゝ
小奏八月も昼此もの也

先生の眼境をつせハ俗なる
ものふて呑て味 琳酒をすす
ウ
居ぢ〳〵石燈籠の夕ゆき
雲ハ巽へ 枝 情乃桐
舟京の其睦 しさたのもさ
階子ハ秋 を九つのよう
陽報乃若木ハ蒼む花乃弦
徳ハ 乗ふあるハるる山



## 秋

古蒼狐

あさつゆの猫隠るゝ小暗かり
蕎とゝ秋迄〳〵京乃神秋　其葉
連山黒い波濤沈月の面絡ふく　川花
庸〳〵秋ゆと今ふ年もとたるむ　番花
堤大ハ月のく発ふ絡おり絡さ　紀亮
野ゝ長ハ月ふ〳〵時ゆ長ゝ　津富
ウ
黄昏の志ん〳〵秋乃積加減　番
ゝ乃抱ゝ〳〵も遠ふ大力　川

上下て清水を飲む泉水に日
武蔵の国清水の所の白雲
桜葉の花笠や書く作り雲
形りとさすと相紅の妻
清水より出るの訓深秋の月
隠れく風小雨新屋もる
清水の盤に入れる秋林
金木犀乃ぬなは 老人
咳花の毒のとる沢蔵量り
夜稼くり芦いろ仲

葉亮 富川 番葉 亮川 富亮 番葉 亮川



数人をも病院乃書のい絵
女中 遠こ味線ゑ合ふ
小者奥小家して浮人形
神の目えも夜更なり
さほふ小思ふ沢利 池業
友り紅と強盗の雪
大根の畠りへ穴こけ
何ちこ 地ゑ紅色
桜め苦の畠ちと清人ふ財ま
ほこさすわく 鳴き芝五

葉川 富葉 番川 亮川 富亮 川亮

○て〻亭
○居

けやうて淡淑の月も炎暑
清〻風亭食を平生　葉
ウ
仲書ふく恵山の二字は居り　番
流然うちの長者代〻　亮
ぬくい緑ふしの風ふかうえ　葉
豆〻ふる續〻揖者　川
碑や常門ヤて花乃絵　番
書一〻ほ乃多原ふる苦　富
寶馬



冬

むら〻ひて千鳥啼之大井川　古蒼狐
小夫も夫を顧る月　乙雉
おの〻ら学乃一向をうそ　左簾
ウ
ひ〻ら　梅東庵の松風　雀翁
おれとの〻新も夫ふ〻ま水　巨川
梅の蕾　桃郷
深〻ふ山のいそ〻
ウ
中〻ら乃袴　左隆
〻ふ新乃弱　左眠

月代の湯をはあるに汲ませて
枯ゆく山は懐ろ場
詩文より二冊ばかりなる覚書
忘れもしいとの芽の掃溜に
唐やうやう忘れさせぬ情まて
見も覚へ歯ぬけもあれ初約
酒を呑まひ云ふ祇陀太子
月ゝ素ハゆゝまて爲れと
めゝ〳〵は清水の伝も花乃音
雛屋もひとをまてをかむ

雉川翁簾郷隆眠雉翁



菖蒲のはまをやうをおとけ人
多乃〳〵ゐは初保をまま
塔をゝむ城の乃節九木格
鬼門を守れ額乃々栄
棒松の蕃然とてゝちけゆ
苔蕃とゝゆもうゝ仲の名
異人の墓一扇ゆ引やゝと
ちよ夜ちうゝ乃ゝ墓
山乃塔は月も別まの清の声
むちぬも蛙〳〵老の焚柴

川郷簾雉隆川翁簾眠隆

亞素もとホ左ての所行伐　郷翁

泊瀬爲乃いろ〻書り

ウ

あさ毛　旅ゝの山宮新宮　簾

笠〻かくれぬ友とち乃新　郷

新風乃あをよ〻ほと〻雲の峯　隆

仰ぎ閑〻造新　高楼　眠

ゆ〻しくて佳〻なる神も花乃家　李門

志うて　餐けゝも笑ま芝ゝ　寶馬

紀

冬

ウ

志ら雪や眼ホ新な川むら〻　古蒼狐

麻ゝ之衣の野さ〻けも　餅字

所世間ホ新むとの皆清〻ゆく　氷楔

さ〻ゆ面影乃ゆ濃やゝ　貴月

新ゆる茅窓の夏も安ホ別　田旦

ゆ〻新〻ゆ〻ゆ西へむく〻る　我浩

ウ

大佛ホ面もホさな角カ〻り　羅松

ホ〻〻ゝ歩行ゝと京のゆく〻さ　寶馬

面白

いりて唯蛍音も山動して　夜来　櫟

かり森の美とよ縄なす蚕　月

ふ秋こ夜ふかなりて一秋酒　旦

祝ふて栗妙杖とたく樂　字

玉ゆ月ゆけ蛍根ばやもこ掛ア　松

ふ玉ゆ三ゆ月のたゆこの色　浩

見ゆと葉ゆ川苔も秋ゆ葉　来

四下の沢ゆ毛勝痩勝　馬

さびの

沙村に花ゆの道ゆ見ゆ　月

あさゆ茎乃色のゆ

京

ナ

たゆゆ八重も強ゆ山　旦

屋ゆく雨のたゆく窓ゆ戸　浩

雨ゆ雷乃小力てむく黄色　松

りゆゆみかゆふゆゆしな　字

悪ゆふ美ゆく同と赤ゆ物　来

河京院　雷乃屋根ゆ明星　馬

ふゆゆやゆらゆゆゆゆく　月

ゆに画とかく野のゆゆし　松

孫ゆと言孫も咲ゆこゆの母　浩

沙林乃樹ゆ文ゆゆ鶯　旦

○鬼

麻の葉いたに鬼神と寂しい
語と云なの寝覚する　星　字
及摺の詞も宮世の詞なるや　来
借書行る日は清きいろも　松
雪の巣小地とゝり巻く仏見り　浩
ゝ巣の義乃ゝ白ゝ蒼天　旦
雪解は踏みゝけて佛の座　月
ゝ踏人ゝ只庵のもゝ白　来
馬

○ゐ

○小

鄙馬

傳ら筋

樹

ウ

夏

君ゝ代や冪ゝえて来る初茄子

時雨ゝゝ空　紅樹

蕾結好ゝ踏くゝ小智恵ゝえて　五璉

松ゝよい地ゝ弁も又ゝ　木丹

ゝゝ雪の鄙小山ちゝゝ鄙の月　寶馬

傳ら明る厂乃ゝ　執筆

ウ　樹

蕾蕾へ結仕の児地見ゝゝ　璉

瓦の紋もえゝゝ蕾級

古蒼狐

羅 羅

宇治より都のむし一異ハられ
ほそるを見神と云ふ　羅
奥州うさ之遊又伐ま妹う作
ふのむ業漬小調度ゑ
ま之ろもむつ井ゆ孫奥め
時ゑの涙ま流ま戎身
已ゆも人ハ作と徒と口ち
迫ハ角うけ乗神　乃村
訴ゆ申る義の本聲う泥抜く
かまゆれ蜂ま寄ふて抜ふう

馬　樹　丹　馬　璉　丹　馬　樹　璉　丹

形

花

長宗さ伝物ふ小拍一番匠等
市年果波な御入内のほ法
世乃新ま屋の身ふも法咲れ
雪伝妻羅う屋ける法の水
家建ま伝ふ法ふ宗屋
一生一度雲律雲時尾
押魚の涙むうくま馬生の脛
御さく腕ゆは佛なりけま
備番う金歌う眠ま八年時花咲
帰りの生い筋ま卜筆　八紅

樹　璉　馬　樹　丹　馬　璉　丹　樹

隙なく氣と所なる月の單　榮梅
樹末ふ浪や栗ふ榜梨子　馬
ウ
太々とうけく古々のもくの秋　五圓
笑えく半のおも猛い充　紅
料理ふ流るる　現名　璉
負くもの多の富を志く　丹
七宝ふ紅ふこる色の海ふ　樹
法蓮も為たく芳き　馬

○理
○き

○夏

夏

盡とく志く雅の子紫ふ
くてなれたる人も長話
窓ふ月家の要乃風ふけく
い法色のまう七達ゆ
隅身ふ何何らひのいくはを
ウ
あくく面なる切石中嘉
宴雪ふ多結よ秋のいちまき
楊ひ樂く馬姓居勝り

○古
蒼狐　其虹
牧之
素云
虹
之
云
虹

都

住めば都 隣りつゝも五三町 之
嫁う代りてもうの好く 云
三尺の踊や先なる冬の沼 虹
月ほゝ三沢夜なゝい八ケ 之
人掘ふ州合めの舞男 云
佛黄ふゝふ誘射金の反 虹
入相ハ別の好く清水色 之
匂匂てゝ冬乃上 仝
ほゝ辞ゝ向へ花のせ三八 云
一天下ゝる春去家中 虹



布川の滝う被の漬くる 之
下女ぼんぐりゝ沢山な眉 云
唐菓子ゝ蕎絵ゝる小手爲 虹
ゝやゝも対勝猪の庖瘡 之
名僧の世話ゝく吉雅ふ年ゝ 云
藪ゝ紅ゝ事ゝ出る 虹
紅ゝ戸ゝ田金花の紅ゝ 之
果鶏の寺姫卵撰ゝ 云
初ゝい門ゝ第城ゝ 虹
森ゝれ数乃肌ゝ温泉場 仝

対勝

藪

松や

拾遺自撰小松の下をとち
ウ
ひろいつゝ　之
沖殺と孫小松をせる孫かり　云
茅とゝ清てかさ出そ風吉　全
夏涼し夜い不自由なる川毎り　虹
乱禅や行灯の自ら建ち　之
雨露の他力とうるく蓮堂　云
西日のつゝけさ峯乃本顔　素外
寶馬

夏

ウ
けらゝれの法のもる竹や軒の外　古蒼狐
眠意をそすす山ちかとゝ沢　意尺
ちらゝ乱見視ち講ゝち帝　冠戎
人ゝ出ゝ　ゝ小乃荷仙　尺
長の夜ゝ照ゝ月　戎
蝶乃をとゝいてゝ乃の月　執筆
ウ
ちゝ向ゝ蕨花小蕨を打原　尺
ゝゝ待のほゝ川ゝ敷　戎

当組の外色おくける古帯冠古
女中給仕乃中の形式
拾ふる文を戻し拵ふる
盃の嵐出眼さし居を
ふり切小一枚ちを広げ
十九古用と同じ
称宜後の肥り色年の高碧り
いと腫乃翠簾紙の月
又翠の花見支度ふ要とメ
年ふ出ひ拵ふ出

尺
戒
尺
戒
尺
戒
尺
戒
尺
戒
尺
筆



茂茅のふ色哺ふ拵し
少国蓑乃ふ名ふ
石筆ふ拵ふ紀茅い奪ふ
親なき児出たけ学問
書め内絵ふ吉沢ふ通し馬
烟とふ乃ふ拵ふ勢升飯
飯ふ傳ふの穴ふ
骨柄斗ふ百石
雲風ふ矢ふの形
古帰拵ふ拵ふ別

戒
尺
戒
尺
戒
尺
戒
尺
戒
尺

すんなる月見小袖の染より　戎
ウ
俤やしと雨つゝ蛙　蛉　筆
稚蔵と祖とゝ行ゝ菓の箸　尺
工夫してまゝ客出口ぬり　戎
あゝ雨つゝ系統のふく加減　尺
一字の徳し　價かゝる　戎
濃ゝ林に花の咲菓ゝ　尺
ゝまんゝと門乃苗代　戎

○水

春

元日や門田の稲葉松乃風　古蒼狐
水の音信　素竹
常出静かを見て　花城
砂の雨ゝ　砂かあふ　熟舟
新雨の高高　もり日代菓　吐鳳
星乃音鈴出　秋の夢　寶馬
六角小ゝ　古屋の柳いゝ　素外
梦ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　津富

○縣　○鳳

流華のゆりとあれい弟姫　乙雑
床揚まへ乃雛飛を繰　花縣
結柳れ橋其る皐月時　舟
ゆるかゝるゝ仕ゝ　鳳
船中の俳諧宮めるゝ事　竹
故郷嘗乃伽ふな俳優　城
窓ふ月火楠も更し拙ゝ　縣
一切経の書写のゝまり　竹
ゆるもまゝ平安堀ふゝ不ゝ　富
人氣ふめゝゝ流を葉し　舟

○仏壇　○八

十

春の風蓑衣の細ふなゝく経　鳳
隠居所乃ゝゝ心腸のゝ伝ひ　城
ぼりゝゝ使ゝゝる感燭の灯　竹
時ゝゝ西紅書の秋乃清　雑
四国年願ゝ荒き誓古事　馬
一女なゝゝ流ゝ　外
詩を思ゝ　舟
蘭ゝ移りゝ寶蔵の和　鳳
名人の左宮も又ゝ母の名　城
像な塊乃祖紀乃月　舟

杉苔の花の乃匂ひゆき白く西く

ウ

てらもあるきへのとみち一枝

寺子屋と廿五日を神祭ひ

降ふ 極楽て餞仕りける

都うさと又さ川うの大湊

むしし 志を勢 礎のあと

待招きり花の拜集を法乃場

中条ふ 揺ふ 称名乃聲

鳳竹縣城富雑外馬

止

考

今い年この一部かの主節をもとり留きを

守らう居にまれ絵巻歌ふれむて女乃

髪を盛りふきたり武蔵ひん初年をを結き

稲荷ゆ 初年と清むるれ山箱の馬を

けもいやれれをうくのうは詩りて山笑の止

屋紀発白しくいてんやと戯れいやを紀百

の事いて考てきりせんを

嵐くいう形をハ人の髪を食ゆや

世とをむをの狐なり嗜めく

かくしてたふ山ようを絵の句を書れり波

ゆをうのよりう祭しし押くつ祭ををを山

北の夜より髪くの事のもくやをめ世を去

たゆひやをしを七月かる奇特のをを異

い

○ 立ちてこそ

出侍りて年世角ふ高り六ゝ雲 獨吟を
ひらくる向ら桜ゝ

紀

古蒼狐

初年の神れ宮りや今雪より
きけゝ紀毎ふ庭の御掌手 之樂
松枝ゝ東風 調ゝ音低く
梅ゝ人の皮を 袴ひふ
月新ふ露の志ゝ玉みかさよゝ
秋の初ゝ色ハ地色ふゝうあを
ウ
新蕎麦の香ハ物別のえよゆえ
十六七 神ゝゝけり

○ 後

文を書ふ志ゝの忍ふ志ゝ
きゝ川 角ゝ山ゝ命角心
仲 枝ゝ世ゝ加ゝ初ゝたゝ
入お雪ゝ里 遠き 寺
雪踏ゝ海ゝ白ゝ乃ゝゝと
歩 枝ふ自角遠ゝ通ゝり
強 後ゝ古ゝ人の証 誠めて
蔵 筆 枝ゝ絵ゝ角ゝ屋
花さゝ心ゝ兼のゝふ
枝ゝ羽織ゝ妻ハゝ

衆

新古今の撰の時の雨降り
衆道のおほせをうけたまはり
支度を無之て二人連
行列町やかたの侍武家
あるを見てあるり涼しく心を
白面の宮ゆ美
迫来ふ物ふのうを我をかう思り
揚句渡りて居る世の中
紅旦しおもひのほふをく美
鄭の程を笑いを知る

面

甄



ふの目もも面ふ切れ和
書物を見ふ為ふ山
弓筆其跡の行を代をも
宿を久しお彼風造也
きのふ都を地のムアア
かをめの八菓子ふ菓小餅
赤度くを笑も花も咲續き
芽もけをふ義る菅の根

## 秋

六月ふる雨の夜をうれ
いつゝ扇ぶくるしく厂
芦の葉の笛ふるも秋の気陽て
菊をかさしふ童子舞たり
探幸に新さうつき乃池のほを
衣敷くゝ京都志賀紀
ウ
長屋ふる秋の紅葉を敷き
佛ほとゝぎす後猶なし

古蒼狐
不言
来道
五眺
兎言
欄兒
不鷹
夏后



蟬時雨紙を蛻を流うえく
さくも男ぶ山ほとゝ久しき
百日紅ゝ毛行井水く咲西し
女陣ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
知恢し魚の池乃玉の露
後庭竹ふく毎もすなり
繪馬ふ画る稲荷の祠ゝ長松
毛句ゝゝゝ
師ゝさふ波迫ふ森笑ふ老乃花
あよみゝりの之 竹

石方
萬機
楚言
此君
波水
擾徳
鳳洲
朝江
寛子
執筆

造営の中井小内匠頭から
ありと伝聞小太郎氏初出仕
孝行れ相りも神さ世成り小
知る雪の如き雪の如き
部る大義大悲の観音者
御るる如くかかる頃い
内匠頭今更驚小驚いる
一番しる事ハ深夜
るるる小春の牡丹牛眠る
陸る風乃義の行き

○巣生

兒　兎　后　鷹　機　楚　言　子　江　道

鬼貫の句ちく出る
清耳るる小徳るるる
蓋行川く夢るの如く信
巣御教えるる科ける
下籠の東山るはなるる
高清小切るる蠟燭乃
市法説く一座各義出
他生の部乃巣も信るる

○巣生

眺　洲　君　方　道　水　徳　佛外

釋

笑

春

涅槃会や釋迦ふ金佛をすむる日
山の僧笑ひ顔なく春の夢　素外
摘まれし仏法を弛たみて
一夜泊りの春めくり旅の
数の春ふ身れ横雲行く空
川ふ流ふ所ふ舟
ウ
吉入新酒絡み合題し
掬ひ清れそうそうむ酒

先師

級

夜の雪羅ふ雨と乃音を絡
ふ海さよ小町このかる
又ぬ方の春ふ安をふるる色
皆かりそのく能うけ
河内路の春ふもく世秋を
身よりを絡川行く年や
老う身初うりかるもゆ
鄙春ハゆる世後鳥丸
天地も伸る日和の秋さ
出代時の紙ふ

夏うれる者て諸今不思烏芋
妙茶好の果ゑて　　鶴年
言いたらぬ押の淦の淋ゝ
郡内領乃流ゑて小富士
旭新ゆゑ山さ春の陸ゑて
市史姫様と書ゑめり
撫ゑ中ゑ元のけるゆゑれ名
なりゑゑ埃ゑ嬉しゑ茶
年山の咲も八百年忘年ゑ
ゑるい腹と上下て色



ウ

ちゑほゑ遠拝行雪貴月
赤ゑむ言乃桑山ゑる
時西さ都ゑ志秋の霜
後押ゑる孝の鳴くゑ
嫁ゑさゑたゑりて素陽の白ゑ
伊和ゑ行ゑても又宮乃年
廣大の雲のゑめゑ七めゑり
京の功徳の陸ゑくゑゑ

擬椿

# 夏

懶惰にて行ずるに任せ
怠しめはする雑穢の清
冥土の徒ムみるとなりてやりて
賦をとりとかくも兼ハ時ハ
待日は是かくに時ありかか
流も山の色かはるころ

ウ

小菜芽芝高の中も門擬
冥土の初めかの夏

先師
津富

知

服服ハ深刻の法く警告事
怪ふとも山の傘を待
屋やくの雲和ふく石鏡影
地ふりふ家く馬麻な川ふ
る舩和ふいたくる成今世
佛と命ず狂りと人
うや山やの窪乃凝義ふ
ふ和市乃義ふく迄て知
義ふて物束かくき候焼く
自物ハ皆怪ふるくたり

おもかる二王と称して此造営
風きそうて吹る刀美後
遊ぶる馬と川辺に立て雲霞
廊ほかて所る須臾一刹
けるとも元寇場を写す事
何ぞ和まてよる 翌日の沙
山町小神河にて枝梅
咲の数を久舞よ久経
途中又ふる雨を夜ふ
隈なく紅葉のみこそ如

秋

先師

雑

を

ウ

樹造り口ほ
切る 芋ふて 活む 賓 物

紀行

後ろ 蛇の師をかうんとて
お情ふ く 望い 南無阿
弥 山えよ 十六か 羅えく
出す 汲て 干ス 待の 冷
蕎を 冷て 西も 日や 晒さん
或 時を 又 節も 休 き
任果く 後も 簾食と 好 活ひ
今ふ 茶 を 雪
石佛を 知ふ う 紀花の 山
風光い 法を 毎ふ とと ふ

[illegible]の極ふ[illegible]
一如くはいて一句一亟
降雲宮[illegible]の小神ふ郭て
被衣ほのに丁子白檀
蘭麝う愛ハ雪氣の裏うれを
いはくう歟[illegible]栖けうん
[illegible]も[illegible]も出さもめ不浪世界
[illegible]ハ[illegible]ものいう織蘿蔔
[illegible]を掛[illegible]ふ西[illegible]あり
[illegible]ふ湖清ふ　三井寺

[illegible]の[illegible]の[illegible]
更く門の年を知ぬ
どちらかの[illegible]も風ハ秋の吉
洋ふ中[illegible]り紀酒乃高ひ
去てその跡も春の色ハ清を
供養[illegible]婦の[illegible]時天
花乃蔭[illegible]ハ[illegible]
續く流を乃めみけ[illegible]

冬

先師

寶馬

庫裏やみなき日枝の大こたつ
ゆるる魂のもとゝ南天
雪ふる世ふ佛なるを拾ふん
拾ふ手の川の脈て見して
風光る市の殺い書信ゆるふ
見村ゆれて井村あるる
ウ
琵琶法師ふて冬の枝とかく
富ふ積ふ正直の蕊

侍遠ふ事のと京の色ハもし
奉ふふ分ふ去して居る
又て又ての舘高いうゝやまを
和稱ふ老ふ汗ふ加ふ身
ふの川ふ終夜と居ふ
風流ふ之沢伯ふ居
ふふ獺ふ簾ふ樊ふて見ふ
大和巡ふふ人
花又て等外ふい云ふ
ふ紙ふ出て書の生き日

関守の只さへ関　三月や
契ふかきうらゝ法象の風信
大法事ゝ終くゝ翠簾ふかし
不思議ゝ一ト日ぢうれの書
松島を紀ゝうゝ奢なれ
天のあくゝ乃ちい人よ多ふ
雲屋ゝ亭ゝるゝ知ゝも親ゝ也
巨鯨蒲鉾の小さやうな給
庵ふかいゝ海色の年歳
曙　別ゝ探　遠ゝ供



往春

霞ふかれゝ雪の海の月
屋色乃浪を庵れ那ふ西
ウ
草枕ふ庵部りの花ゝ
神に崇の心ふ花ゝ
ゆゝ乃ゝ乃ゝ聽乃果り龍
ゝの舞ゝ思ゝ歩ゝ本胴窓
獨吟乃同發菩提心歩花ゝ
先師往生安樂乃春

懷舊

# 懷舊

順混交

雪の朝一條こゝ一法の聲　雅郊
すゝ冷こゝさ雪積の庵や七周　江鳥
潛こゝ紅雪夜乃梅や常今伝　寶瑟
大雪や七ツまこゝ面如　蒼尾
紅梅こゝ和ふ白の高い　素芹
こゝ雪や梅もかこゝ紅の流　素一
雪まこめ梅こゝ七高　盤李
七ツ時清や冷こゝ雪乃花　寶國

雪の岡乃白さもこゝ七ツ　春律
此日和小夏とはこゝ面の音　弗外

先師終焉の詞を夢い出く

こゝけのちかこゝ雪まこめ　蒼牛
清こゝ白こゝ千句や七めこゝ　狐童
弱こゝ人こゝ武　漏庐
此悲こゝ胸こゝ紅や雪おこゝ　狐蘭
山茶花や雪白こゝ紅こゝ　盲人三調
紅梅こゝ旭の高や墓の高　歲鳥
七夕こゝ七夕清こゝ雪こゝ雪　馬郷

五千巻の箱を乃敷こそ
よの法はれすとそ
事をなつ今胸中ふしこ眼裏に落り

○ひさ

四季 杉く 在う如しひさの雪　笠斉

ぬし亜その道 動るし 新之菓　歩笛

極楽乃てらけの水仙花　祇洞

弥るの形し七度かうん 累伽のも　女 笠丈

かはるふきい七ひを宗し 猫乃寒　十瓜

七曲の坊ひるる声や 皮ふ雪　蒼兎

七人を去りし 新や雪のあと　蒼狗

なつめてるるもの 義や夜乃雪　蒼猫

を

先師世ふい戸 松かし時八手う芽 歩雪
ちりるるど ふく 秀のひん雪るを 芝
知沢秋の夜乃 物るるとも いくく
波知しるいくと 西乃行をのやふん
受待るにや七 ふのるを春なれハ

○さ

七くるれ言とも 同じん 納を汁　笠松
日の恩乃 帰をと 知るや大根引　おれく
かくをけさ 孫人し 雪の雲　帰興
遠を世ん 清も 動しひさ 夜ふ　卜人
五千句乃 ちるゆし 大根引　賤士
去くく や七日 芝居の 海を 松　莫舎屋

○賤

○賤

餅字　貴月　田旦　我浩　夜来　麗松　窓雪　集把　素登　孰船

苔雨　曾十　麥白

呼千鳥恒河沙の白と吐一人　帶踞
はるかふる雪ふるや風の雪　了因
俳諧の門の前うら路の前　雅山
其角の耳ふる雪おろし　湘水

元史二百五十大数のふるいとなりひむく
五千句の句はしまねはしむかき　風馬
五百句乃ち絵きもはきもの句　如竹
七百句のたふ絵の月枝うの句　吟松女
雪絵くけふうまの若世界　馬丈
発句して同じく芭蕉庵　蒼雨

旭又よ生先明の雪の山　釈千嶂
炭俵くうそや七七七発句養　春里
見一世一愚とふ揚ふうん多揚　向人
中出を作意もなかも雪佛　其禮
月義や世ふ絵さ雪九　仙里
句の上乃ち句む大根引　操舟
ふうふ数やふ絵巾　青芝
氷ふ多よき年の世乃続　雀歩
筆とやふ句ふ雪ふ雲　素云
一泓ふ絵を金砂の先り小　花藍

芳雲洞の先師五千里乃翁ふ
歌をもて事成告こしらへ

七尺の新とはなる世の時雨れ　泉州岸和田　北波
ふるさとの雨振り寂伽の多　総州佐倉　梧鳳
七夕乃法とる雨を六乃義　武州岩槻　何来
菜の花や野辺の雨　七曲　野州乙女　蒼洲
時雨れ十方世界　雲収乃月　同　氏家　錦河
雲はれ乃月や七堂伽藍ふと　同　蒼篁
霜さえ一句ゝの鳴と古き人　同　櫻野　始白
寒菊乃星霜歌ふ七夕乃　同　安沢　東國

流物和みも雲乃さき　桔梗　羽州　百童
云の糸ふの源や袖る袋りみち　同　素盈
水仙や菜ふとり付き雨乃　南部盛岡　芦皓
止すして雪の七夕世鳴呼昔　同　信佐
来かとりや花なりり句を仕史　同　郡山　乙外
ろの玄武菊ふや雪乃吉柳　同　素漣
竹清のさ和ら武雪ふ　奥州石巻　塞馬

父在さ時ハ遠く旅ハ師ふ後てハ七尺の
新を踏ふ古菊多寄ふ師ふて妻ろ
父なり嗚呼去事の遠く月日の迫きと
雨して去られハ年を墳の和　蒼岨

仙臺

五十里の行くしい戸せきの時発句ん
孫とたしひ一本ふ朱上の奥行くを拾いて
寒くて高くの沢四時の嗜

描かふ家根乃うこや臘月　芦英
今光る風の雪鯛屋の夕松魚
鄙頭や夕日の裾を引くす
大寒へ行くひかるや柿乃毒

文通之句

初詣や名をふすまくるこ斗　仙臺○
雪の世を拾ふ川の柳　同
ぬくもれや出りを初月秋　同

周平
文芝
祇川

○さ

ふるを先晴おほせり秋の山　仙臺岩沼
咲かふふせきを盗りや菊乃毒　上州館林　休粹
追福　犬磨

七宝の菓の花や人も一むら　来尓
ある名乃年ふ雪や雪　佛　寸松
石乃雪や仏人死りたるの跡　季大

、

言葉を佛ふさ別深ふ　石鯨
海棠や眠い時ふをあくえめけ先ハ手ふ名句乃
賀小海ふ眠ふ西ふ岩ふ今夕ふ思い出ふ世ふ也ふ
出ふえふと火の乱けてのえさふ　不言

七種の跡 芳しきや 素堂塚　紫鳳

中年久しきとなりしに

頭巾ぬぎて禮なるうしろ向れ　平砂

七夕の佛ぬるや囲炉裏さく　牛呑

佛

前。を ニテモ　ハ ニテモ

、

きえて月も雲の月の光りかな　尤簾

くらめ笠の西新や世の乗合巾　桃義

懐旧

七夕ゆうべ八十の古城元　泊涼

俳諧ぬ。ふ。て遠ふ師恩をわすれ給ふ

姫ぬぎ巾ぬ。ふ七夕雪の夕　五璉

師孫馬の時枕ふりかたうしかも凍て

ぬ。ふ。ふ。ふ。と極て庭の一周忘れ

同門の知己の判者の句は一紙の

ものとなりて出ぬ。ふ。ふ。ふ。

名を三国の辛ハ方句異の門生

なりて一流乃極宗ぬ。ふ。ふ。ふ。

ものとなりぬ。ふ。ふ。ふ。ふ。

追善ぬ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

二冊子の集成　宝馬と発生して

見て行へ見て供養の場の雪　素外

先師一日獨吟五千句の流行を傳てより五千堂と
号し侍りしを世人聞て壽也と称りふに師翁の
雄才名聞は流行也と世に聞えたる沢年之旦夫
門生雪江亮を撰して獨吟の千句を吐
屋に発りて千句に為て隔尾を楚ふと
示教の句編雜俳の法式を以せる跡して
一句乃帰るけしきや病中も新宮作集九
よりく概年して句金の面顔二度ふかふ
又或日五連化トまりて床上の元気を霸ふ
ものの吟の巴八字に脱せしけり俱に四吟
百員乃巻なるふかくして終焉前一日ふいまう
ちるより居吾汝ふいくんるかりて道のおりと





去年事ともに二ツ三ツ語りて記しを辞世乃
吟と書しく今もかりを固辞して師惟路茶
すを一日ふ生駒ふ行ふ所と慰山風もあるを
路ふを乞ふ順ふ哀ふ師ふ極業を勤ふ年
此一句ふ留る七世の今日精同茶のよ
文政乃こ乃雪月乃経机　津富
やりて赤坂ふりて仕年の所より吉翁ふ
因ふ伝りしふ路ふ一場井の門ふ入て法林寺
別席と為ふ人ふ日拾香して焼田乃
一句と呈す
ちるや今雪の吟り寺　孫庭　花縣

炉の薪と沈や いさらう 志 爸梁

[illegible]

自自

水入のとき[illegible]

かく引出されたる 自他の区別

自意の死活の境あるもいふべきか

雉

示さるまゝに今田ひさの作るく

[illegible]

雉 乙

古翁追福某の校書に[illegible]

一領所愛の令跡止りと又風雅の

業いふ拙き業とて作りし病いう

即て果て沢書云ふ[illegible]と

伏くゝ半勤めし 一芸 木冊

[illegible]今日[illegible]先師
七周忌の[illegible]小[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]恵を
[illegible]備[illegible]道に交り深く
詩風[illegible]より近く[illegible]連吟獨唱の
懷舊[illegible]遠く追悼作義[illegible]
句[illegible]紙[illegible]を[illegible]
都[illegible]二十六[illegible]幾句百[illegible]
吟法[illegible]の儿[illegible]ふ[illegible]則[illegible]と
聲[illegible]碑[illegible]に[illegible]一流及
[illegible]







[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]章
[illegible]の[illegible]人[illegible]を[illegible]て道[illegible]
[illegible]一[illegible]井[illegible]編[illegible]且
[illegible]に[illegible]楽[illegible]川[illegible]
小舟[illegible]二[illegible]人[illegible]の[illegible]小師[illegible]
の[illegible]と[illegible]し流[illegible]
[illegible]窓の[illegible]先[illegible]文房の護[illegible]
[illegible]人[illegible]と[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]小雪の[illegible]や[illegible]の恩　實馬

追加

丈ふかくおろかけ雪降ける　佐幸
波う世うち雪の富士せめて　風丈
おりのぼる匂ひ　東晩
月華や今ふる涙の耳の御　西爾
雪ゆふ見れば如在　慮得
句達者の上手四ツ雪の夜話　楽門
伏見をん句のとの浮ふき　故道
ふ風や清く　鶴舟
月ふる雪晴ふる清の夕　此山
　　玉圃